

鳩が飛び立つ日 — 石井筆子 —

明治の初め、華やかな鹿鳴館で、訪れたドイツ人医師に『私がこれまで出会った最も魅力的な女性』と称賛された一人の女性がいました。限られた家庭の子女しか教育を受けられなかった時代。フランスに留学し、華族女学校の教師として日本の女子教育に奔走していた筆子（石井筆子）です。明治三十五年（一九〇二年）、筆子らの努力で女子教育が充実しつつあったある日、筆子はもう一つの道へと進もうとしていました。



女学校の校長室の窓から、外に広がる緑がまぶしく輝いている。明るい光が差し込む校長室の机を筆子は慈しむように見つめた。日本の未来を築く女子を育てる。その筆子の夢を支えてきた学校を、今日、筆子は手放そうとしていた。

「強い人は弱い人を助けなければなりません。」
筆子の耳に、ふと、遠い日に聞いた言葉がよみがえった。

あれは、筆子が女学校の教員になったばかりの頃、ある英語講演の同時通訳をした時だ。講師はアメリカ先住民のための学校を設立した女性。彼女の父がいつも彼女に教え聞かせていた言葉だという。困難の中で意志を貫き通した女性の姿は、自信にあふれていた。筆子はいつしか自分自身に問い掛けていた。
「私にできることは何だろうか。」

当時、筆子は、生まれたばかりの次女の病気の看病に追われながら仕事を続けていた。三歳の長女には知的障害があることも分かった。明治半ばの日本、知的障害のある人には、学ぶ場所も働く場所もない時代

だった。筆子の華やかな活躍を知る世間の人々は、「かわいそうに」と筆子に同情の目を向けた。私は負けな
い、と筆子は思った。日本の将来を担う日本人女性たちを育てることが自分の仕事。筆子はきっぱりと前を
見つめた。

生まれつき病弱だった次女恵子は、わずか一歳で亡くなった。その悲しみが癒されない中で生まれた三女
の康子にも障害が見つかる。更に追い打ちをかけるように、筆子の仕事を理解し、支えてきた夫も、病でこ
の世を去った。筆子と子どもたちを残して。

筆子たちの努力で日本の女子教育は実を結びつつあった。だが、筆子の心には晴れない思いがあった。自
分の娘たちはこのまま社会の片隅でひっそりと生きていくのか。

「私にお嬢さんを預けませんか。お嬢さんのような子どもたちのための学校を創って、教育を受けさせたい
のです。」

そう言ったのは、筆子の学校に講師として招かれた石井亮一だった。〈教育？〉筆子は亮一の言葉に驚いた。
母である筆子ですら、娘たちは社会の重荷なのだと思っていたのだ。

「この子たちに教育を？」

不思議そうな顔の筆子に、亮一は力強く理想を語った。アメリカに留学して最先端の障害児教育を学んだ
亮一は、ふさわしい環境があれば知的障害児もその子の歩みで学び、育ち、社会で働くこともできる、と確
信していたのだ。その夢に、筆子の心は踊った。

この夢を実現させたい。自分もその役に立ちたい。

亮一の歩む道を共に進もう。そう決意して、筆子は、これまで育ててきた女学校を仲間一人に譲り渡し
たのだった。女学校の校長室の扉を閉め、筆子は亮一のもとへ向かった。

亮一は、滝乃川学園を創設し、親を失くした子どもたちや障害のある子どもたちへの教育を充実させよう

としていた。筆子は一教師として子どもたちに向き合い、自らも障害児教育について学んでいった。その情熱は、二人の心を強く結び付けた。筆子は亮一と結婚し、学園の充実に奔走する。ゆつくりと確かに学んでいく子どもたちのたくさんの顔が、日々の苦勞を乗り越える大きな力を与えてくれた。

次女恵子、三女康子を病で失くした筆子の元には、長女幸子だけが残されていた。学園の子どもたちと共に成長していく幸子の姿は筆子の心の支えであった。その幸子も、入退院を繰り返した後、筆子に看取られて目を閉じた。筆子は初めて声をあげて泣いた。幸せになって欲しいと願って名付けた幸子、豊かな恵みがありますようにと名付けた恵子、そして、健康に育って欲しいと思いを込めた康子。大切な娘たちの誰一人として幸せにしてやれなかった。突き刺すような痛みが胸に迫った。

筆子は幸子が学園で描いた絵や刺繡しじゅう入りのハンカチを手にとった。その一枚に小さな鳩が刺繡されていた。仲間たちと一緒に一針を丁寧に入れる姿が目に見えぬ。広い世界へ飛び立つ日を迎えられなかった娘たち。ハンカチを強く握りしめ、筆子は再び強くなろうと決意した。学園の子どもたちを守り育てるのが自分の使命だ。あの子たちがいつも笑顔で暮らせるように支えていこう。苦しいことも辛いことも、子どもたちと一緒に乗り越えていこう。

大正九年（一九二〇年）の秋、筆子が学園の教育に取り組んで二十年が経ったある夜、学園で火災が発生した。大火に襲われる中、筆子たち職員は必死に子どもたちを避難させた。さらに火の中へ入って子どもを救おうとして、筆子自身も足に大きな怪我をしてしまう。この火災で、園児六人の命が失われた。火事の原因は、一人の子どもの火遊びだった。

火で遊ぶことの危険が分からない子ども。火が目の前に迫っていても、恐さが分からない子ども。そして、恐さのあまり、逃げることもできず布団にうずくまって死んでいった子どもたち。自分が何もできない

かったことに、筆子は立ちすくんだ。

社会から見放された子どもたちを守るのが自分の使命。そのために強くならなければ。そう決意してここまで歩んできた。だが、その子どもたちを目の前の危険から救ってあげられなかった。助けを求めていただろうに。迫りくる火の中でどんなに苦しんだらうか。

誰一人、守ってあげられなかった。自分の使命などと、なんという思い上がりだろう。

亮一も同じ思いだったのだろうか。学園の廃止を決意した亮一に筆子は黙ってうなずいた。この先、一生、亡くなった子どもたちを思っぴひっそりと生きていこう。

ところが、筆子の元に、学園の廃止を知った人々からたくさんの声が寄せられた。学園存続のために寄付金を送ってくれる人。筆子が教えた卒業生からも。筆子の故郷からも。

励ましの手紙を読む筆子の眼前に故郷の海が広がった。少女だった頃、切り立つような坂道を一気に駆け下りると、突然視界が開け、青い海が筆子を受け止めるように広がっていた。入り組んだ湾に重なりあう島々の深い緑の中から、一羽の鳥の影が水面を低くかすめ、やがて青くどこまでも広がる大空へと、高く、遠く飛び立っていった。

助けられなかった子どもたちの声が聞こえる。〈せんせい。〉と呼ぶ声がする。

私には子どもたちの声が聞こえる、と筆子はつぶやいた。自分は強かったのではない。あの声に助けられていたのだ。その声に応えよう。応えなければならぬ。私が、私たちが、この社会の中にあの子たちの居場所を創るのだ。もう一度、そして、何度でも。

筆子は、亮一と共に学園を再開した。学校で学び、社会で働く。その可能性が全ての人に開かれた社会へ。筆子の歩みは、最後まで止まることがなかった。